

研究動向

「子ども」 —— 保育の理念と課題 ——

浅見 均

本プロジェクトは2009年度より2010年度にかけて上記のテーマで、4人のプロジェクト構成員によって進められている。そのテーマは次のような背景を持っている。即ち、現代社会において乳幼児は実に様々な環境の下に置かれている。国は認定こども園という、幼稚園と保育所の一体化施設の設置に躍起になっている。男女雇用機会均等法が制定されてより、男女を問わず大人が安心して働ける社会を目指して環境を整備しているのである。この認定こども園の幼保一体化政策は、わが国の子育てを親に代わって行おうとする施策であり、子どもはどう育つべきかという子どもの視点が欠落しているものであるといえよう。本研究プロジェクトは以上のような現状を踏まえつつ、あくまでも子どもに視点を置き、子どもに纏わる幅広い研究領域より講師を招き情報収集を行い、さらに乳幼児の生活する施設に全てのプロジェクト構成員が赴き、視察することを通して、共通の現状認識をし、課題の所在についてそれぞれの研究領域より迫ることを目的としている。

プロジェクト構成員の研究テーマは次のようになる。即ち、浅見均（子ども学科）『幼児教育のあり方を探る—保育環境を中心として—』、森下春枝（共通教育科目）『子どもと遊び—子どもを元気にする運動・あそび・指導—』、

渡部かなえ（子ども学科）『小さな命と健康を守る—小児の健康教育・安全教育—』、吉仲淳（青山学院大学）『音（楽）の世界から見る幼児の表現性と身体について』である。

活動報告

1. 講演会

講演会は年間4回行い、子どもを巡る様々な角度からの情報収集を行った。

1) 9年7月6日：佐伯胖氏（青山学院大学）「幼児教育における遊びと学び」、2) 9年10月21日：大野芳材氏（本学芸術学科）「フランス美術における子どもの表現」、3) 9年11月30日：藤森裕治氏（信州大学）「子ども自身の生活背景の登場人物への投影～レオ・レオニ作「スイミー」を手がかりに～」、4) 9年12月22日：福岡秀興氏（早稲田大学）「女性の一生を通じた健康」、5) 10年3月23日：簀光夫氏（千葉明德短期大学）「保育の理念と課題—沖縄をフィールドとして—」、10年6月29日：片岡進氏（幼稚園情報センター代表）「日本全国おもしろ幼稚園見聞録」

2. 保育現場視察活動

北海道、沖縄、長野における特徴ある保育展開を全員で視察した。

(1) 北海道幼児教育状況視察

(9年8月25日～8月27日)

北海道は認定こども園の数が非常に多い。われわれは認定こども園の様々な状況を視察するとともに、アイヌ民族が多く居住する地域にも赴き、そこでの保育の実際についても視察を行った。

①札幌市立認定こども園「にじいろ」

【幼保連携型】（札幌市清田区）

本施設は、札幌市が誇るモデル的な幼保連携方の認定こども園であった。幼保連携型認定こども園は、同一施設内に幼稚園部分と保育所部

分が共存する施設で、文科省推進モデルである。

園長との懇談のときを持ち、幼保連携型の施設の問題点として、幼稚園の教諭と、保育所の保育士が存在、勤務時間等様々な点で不都合が生じるということであった。また、子どもたちも幼稚園児としての子どもは夏休みをとり、降園時間も早いなど幼保連携型の施設の抱える課題は多いと思われた。

②認定こども園「かすたねっと」【地方裁量型】

(札幌市東区)

ここは無認可保育所が、地方自治体の裁量により認定こども園となった施設である。このような型の施設は全国でも数園に過ぎない。ここは、駅前型の施設として存在し、ビルの3階にあった。畳40から50畳ほどのワンフロアで、0から5歳児までがそこで生活をしていた。部屋は縦横に走るカーテンレールにカーテンがつけられ、年齢ごとの活動をする時には、そのカーテンで区切って行われる。訪問時には5歳児は運動会の整列の練習、0歳児は外国人講師による英語遊びが行われていた。園長の話によれば、サッカー教室から英語遊びなど様々な習い事が保育中に行われ、それが保育の目玉にもなっているとのことであった。私立の生き残らなければならないという経営事情が伝わってくる施設であった。

③古平町立認定こども園「ふるびら幼児センターみらい」【保育所型】(古平郡古平町)

ここは施設ができてまもなく、設備は整っていた。この施設は保育所型の認定こども園であるので、全て保育士によって保育が行われていた。したがって労働上の違和感はないということであった。また、幼稚園、保育所があったが、子どもが少なくなったので一つにまとめて保育をしようということでこの施設ができたということであった。

④「平取町立二風谷保育所」(沙流郡平取町)

二風谷地区での保育活動の実態を視察。アイヌ民族の子どもも在籍し、自然環境豊かな中で保育。われわれは施設を視察し、園外保育に同行、元気にたくましく遊ぶ子どもたちの姿を

見た。

(2) 沖縄県幼児教育状況視察

(10年2月23日-25日)

沖縄は離婚率が高く、片親の家庭が多い地域である。また、5歳になると保育所から離れ、幼稚園に行くという地域としても知られている。様々な意味で地域の特殊性をもったところである。そのような沖縄で、子どもたちはどのように生活をしているのかについて、那覇市にある幼児施設を視察した。

①「みどり保育園」(首里石嶺)

当該施設は地域に根ざす保育所を目指し、子育て支援センター「なんくる家」(なんとかなるさ)を併設する認可園。我々は園長に沖縄の幼児の生活の様子や、園長の熱い保育理念などを聞いた。

②「夢童幼稚園」(繁田川)

当該園は無認可の保育施設である。設備面で広いホールや、室内プールなどを備え、充実した保育環境を持ち、理想とする保育をするため敢えて無認可を貫いている。職員も主任などは職員間の選挙によって選ばれているなど随所に園長の保育に対する夢や、思いを感じることができた。

②「翁長(おなが)幼稚園」(豊見城)

本施設は戦前より地域の自治会が運営の無認可保育施設。園長は自治会長で自治会館を利用して保育を実践。保育者は数名いるが、運営は殆ど39名の園児の保育料月4千円～8千円で賄われる。外にある遊具、テーブルなどは保護者の手作りであった。保育者の給料は本当に安いものでボランティアのように思えるが、保育者の目は輝いていた。

③「みそら保育園」(豊見城)

当該施設は公設民営の保育園。園長は自分の幼少時地域の人に世話になったので恩返しとして保育を行っているかと熱く語っていた。

④「あおぞら保育園」(南城)

当該施設は、那覇市内でも最大級の規模を誇る保育園。斉藤公子の保育の影響を受ける園で、広い敷地と充実した保育環境を持つ園。沖縄は

5歳児は幼稚園に行くのが一般的であるがここの園児の多くはこの園を選ぶという。

(3) 森の幼稚園視察（10年9月8日-9日）

「子どもの森幼稚園」（長野県飯縄）

我々は保育の理想を求めて当該園を訪ねた。手作りの木造園舎、大自然を保育環境として、大自然に抱かれ遅しく遊ぶ子どもの姿を年長児

保育プログラムに同行し、目の当たりにした。

以上のような視察や講演を礎とし更なる研究活動を継続し、これからそれぞれのテーマで論文を作成していく。